

〔書 評〕

IAWA Bulletin, New Series

この雑誌は国際木材解剖学者連盟 (International Association of Wood Anatomists) が編集発行している季刊誌で、木材解剖学全般についての様々な情報が載せられている。もともとこの連盟の News Bulletin として発刊され、1970年以降1979年までは短報誌的な性格の IAWA Bulletin として刊行されていたが、1980年に New Series として体裁を改めるとともに、学術雑誌としての性格をも兼ねそなえるようになった。その内容は現生の木材に関するものがほとんどであるが、最近コンピューターによる同定や学術用語の標準化などの問題が扱われており、他の分野の参考にもなると思われるので、そうした問題を中心に紹介する。

Vol.1 (1980) の巻頭には M. GREGORY (pp.3-41) による木材同定のための Bibliography が載っており、それ以前の文献が地域ごと、科ごとにまとめられている。また、木を倒すことなく木材のサンプルを採取する方法のリスト (J. P. J. SWART, p.42) や、木材標本にも証拠標本が不可欠であるという論説 (P. BASS, p.72)、二次篩部の細胞の定義についての提案 (N. PARAMESWARAN, pp.130-132)、コンピューターによる木材同定の方法の紹介 (R. B. MILLER, pp.154-160) などがある。

Vol.2 (1981) にはコンピューターを用いた広葉樹材の同定について、識別カードの情報をコンピューターに入力したという報告 (R. G. PEARSON & E. A. WHEELER, pp.37-40) と、連盟の委員会の提案による形質の標準化とコード化の一覧、およびその解説 (IAWA Committee, pp.99-145) が載っている。Vol.3 (1982) には、始新世の材化石の報告 (R. A. SCOTT & E. A. WHEELER, pp.135-154) および *Sphenophyllum* の形成層についての報告 (M. A. CICHAN & T. N. TAYLOR, pp.155-160) がある。

Vol.4 (1983) には γ 線を照射した古材の走査型電子顕微鏡による観察 (G. TSOUKIS, pp.41-45) や、熱帯地域のマメ科について1981年のリストにそって記載を行なった報告 (J. T. QUIRK, pp.118-130)、広葉樹2種について炭化による構造の変化を調べた報告 (J. PRIOR & K. L. ALVIN, pp.197-206) などがある。Vol.5 (1984) には矮性化による木材構造の変化についての報告 (P. BAAS, L. CHENGLEE, Z. XINYING, C. KEMING & D. YUEFEN, pp.45-63) がある。

Vol.6 (1985) には、1981年に提案された形質のリストに対する批判およびデータベースの簡素化の提案 (E. A. WHEELER & R. G. PEARSON, pp.151-160) が寄せられている。また、連盟が1964年に発行した Multilingual Glossary used in Wood Anatomy の改訂にむけて、学術用語の定義あるいは補充に対する提案の呼掛け (P. BASS, p.83) がなされている。Vol.7 (1986) には先の呼掛けに答えて、年輪 (S. LEV-YADUN & N. LIPHSCHITZ, p.72) や道管の分布密度 (E. A. WHEELER, pp.73-74)、壁孔のない通導要素 (S. CARLQUIST, pp.75-81; P. BAAS, pp.82-86; S. CARLQUIST, pp.168-170) などの用語について提案や討論がなされている。また形質のリストに対する先の批判について、リストの提案者からの回答 (R. B. MILLER, pp.255-262) が寄せられている。

木材解剖の研究者は世界でも数は少なく、年間400ページもの原著論文を集め、発行していくのは並み大抵のことではない。この雑誌の事務局はオランダの Utrecht University の Dr. B. J. H. ter WELLS の所であり、編集長は Rijksherbarium の Dr. P. BAAS である。彼らがこの雑誌のために割いている手間と時間は

膨大なものであろう。オランダに限らず、欧米系の研究者の国際雑誌を保っていく努力とそれを可能にする研究環境には敬意を表せざるを得ない。(事務局 Dr. B. J. H. terWELL, Institute of Systematic Botany, Heidelberglaan 2, P. O. Box 80.102, 3508 TC Utrecht, the Netherland 年会費 US 28 ドル)

(能城修一)

植物地理・分類研究 (北陸の植物)

この雑誌は植物地理・分類研究会が編集発行しているもので、植物の地理、分類や形態、生態などの論文が中心になっている。もともとは1952年より「北陸の植物」としてA5版で26巻まで刊行されていたが、1979年の27巻からB5版に体裁を改めるとともに「植物地理・分類研究」と改称したものである。

「北陸の植物」は当時金沢大学理学部の植物学第一講座の正宗徹敬らが創設したもので、当初から高等植物はもとより、コケ、藻類の植物地理、分類、生態は化石植物もと広い範囲をカバーし、主に北陸地方の植物研究者によって執筆された。これは段々と執筆者と執筆内容において全国的に拡大していき、雑誌和名は「北陸の植物」のままだったが、英名は The Hokuriku Journal of Botany からいつしか The Journal of Geobotany に改名されていった。

この雑誌が第一の転機を迎えるのは1979年である。1巻では広告も含めて44ページであった雑誌が、この年に出た26巻では114ページと約3倍になり、量ばかりでなく内容も充実してきている。この年、80歳を迎えた正宗は編集者の地位をそれまで実質的に編集を支えてきた里見信生に譲った。里見はそこで北陸在住で雑誌の発足当時から活躍してきた人々に呼びかけ、雑誌の体裁変更を含む大幅な改革を行った。それまで発行主体であった「北陸の植物の会」をきちんとした会則を持つ「植物地理・分類研究会」に組替え、雑誌の発行のみではなく研究会活動として年に一度全国大会も行うようになった。しかし一番大きな変更は編集委員会制を取るようになったことと雑誌名を「植物地理・分類研究」(The Journal of Phytogeography and Taxonomy)に変え、B5版で年2回発行にしたことだろう。編集委員会は里見を編集委員代表に7名の委員で構成され、雑誌の発行のみならず研究会の運営も行っている。雑誌の新名は当初は京大の植物分類学講座が中心になって出してきた「植物分類、地理」と似ていて、また何れもB5版で白表紙に背文字無しと大変紛らわしいと、正直言って余り評判は良くなかったようだ。しかしその後、論文の体裁も統一が取られるようになり、背文字が入って表紙を各巻毎に淡色系の色紙にするなど、徐々に改善が加えられ、しかも英文論文が増え、内容も高度なものが多くなってきている。また各号の表紙を植物を使った紋章などの写真が飾っていて、表紙裏にその解説が里見によって加えられていて面白い。

1986年には「北陸の植物」時代から通して34巻、120号を数え、それを機会にそれまでに登場した植物と著者名の総索引が発行された(頒価2000円)。そして今年35周年を迎え、35巻第2号では記念号の発行が計られている。くしくもこの雑誌の創設から中心にかかわってきた里見信生教授は来春金沢大学を定年退官する。氏の退官がこの雑誌の35周年、35巻に一致したのは偶然の事だろうか。(年会費3000円、〒921 金沢市久安4-361 里見信生方)

(鈴木三男)